群教セ	J01 - 01
	平16.220集

自己と他者の違いを認め 他者の考えを尊重する生徒の育成

―― 居心地のいいクラスにするための話し合い活動を通して ――

特別研修員　　湯浅　卓也　（榛東村立榛東中学校）

《研究の概要》

本研究は、学級活動や道徳で居心地のいいクラスにするための話し合い活動を通して、自己と他者の違いを認め他者の考えを尊重する生徒の育成をめざしたものである。まず、「大切なもの」というテーマでの話し合い活動により価値観の違いを知り、つぎに、居心地がいいと感じる時について自分の考えを持ち、さらに、それを話し合うことにより他者との考え方の共通点や相違点を踏まえて、自分を見つめ直そうとする活動を行った。

【キーワード：人権教育　中学校　学級活動　道徳　話し合い活動】

Ⅰ　主題設定の理由

生徒はだれでも居心地のいいクラスを求めている。居心地のいいクラスを築くためには、自分と友達の考えを知ることが大切であり、その手段として話し合うことが挙げられる。また、話し合う活動により自分を見つめ直すことはとても意義のあることである。

本学級（中学１年生　女子18名・男子19名）は体育大会優勝、マラソン大会優勝、合唱コンクール最優秀賞と生徒が個人の能力を発揮し、いざというときは協力して大きな力を発揮してきた。しかし、容姿や行動によりその生徒を判断し、陰口を言ったり仲間はずれにしたりという言動が皆無とは言えない。実際「イヤなことを言われる」「変な目で見られる」と訴えてきた生徒がいたり、フォークダンスの練習の際に、特定の生徒に対して「手をつなぎたくない」という表情をあからさまにしたりする生徒がいた。

また、『居心地のよくない時はどんな時ですか？』というアンケートに対して、「誰かの発言に対して、笑ったり変なことを言ったりする時」や「注意をしたのに聞いてもらえない時」、「仲間はずれやいじめを見た時」といった回答が見られるように、相手の意見や注意に耳を傾けられない生徒や他者の気持ちを考えられない生徒の存在が浮き彫りになった。

相手の意見や注意に耳を傾けられない原因としては、生徒同士の人間関係が固定化していることや生徒同士の関係が希薄なため、自己と他者との違いに目を向けようとするまでに至らないなどが挙げられる。そして、自己と他者の違いを見つめる経験が少ないことなどが考えられる。

そこで、自己と他者の違いを見つめる経験を持つ活動を意図的に取り入れた。まず、他者との価値観や考え方の違いについて気づく。つぎに、集団の中の一員として自分のしっかりした考えを持つ。そして、自分の考えとの違い（自分の意見と同じ点や他者の異なる意見であっても納得してしまう点）を受け入れることにより、自分の考えを深める。こういう経験をたくさんすることにより、自己と他者の違いを認め他者の考えを尊重する生徒を育成したいと考え、本研究主題を設定した。

II　研究のねらい

学級活動・道徳での話し合う活動を取り入れることにより、自分の考えをしっかり持ち、他者の考えに耳を傾け受け入れるようになり、自分の考えをさらに深めるようになるであろうことを実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

次の見通し１から３の取組を行えば、はっきりした自分の考えを持ち、他者の考えに耳を傾け、両者の意見の違いを承認し、さらに自分の考えを深めるようになるであろう。

1　学級活動「大切なものはなんですか？」において、自分の大切なものについて発表し、グループで話し合うことを行えば、大切なものについて、さまざまなものの見方・考え方があることに気づくであろう。

2　道徳「花びんはなぜこわれた」〔４－①集団生活の向上　４－③よりよい社会の実現〕で、集団の一員について学習した後、自分の居心地のいい時のことを日常生活の中で場面ごとに振り返ることにより、自分の考えをしっかり持つことができるであろう。

3　学級活動「居心地のいい時って？」において、グループで話し合うことをすれば、自分と他者の考えの違いに気づき、他者の考えを受け入れ、さらにもう一度自分の考えを見つめ直すことができるであろう。

IV　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　「自己と他者の違いを認める」について

人間は顔かたちが違うように、ものの見方や考え方は人それぞれである。自分自身のはっきりした考えを持ち、他者の意見にも積極的に耳を傾け、正確に聞き取り、自分との違いになるほどと思えることであり、それが自己と他者との違いを認めることにつながるのである。つまり、自分と他者の意見の共通点・相違点に目を向け、相違点も納得できることである。

(2)　「他者の考えを尊重する」について

自分と異なる意見であっても納得したら、それを受け入れ、さらに自分としての新たな価値を創造していくことである。つまり、他者の意見を参考にして、自分の考えを再構築できることである。

(3)　「居心地のいいクラス」について

イジメや差別がなく、自分の存在感や所属感が得られ、気の合う仲間のいるクラスのことである。そのためには何でも話せる関係をつくることが必要不可欠である。話し合う活動を多くすることにより、相手を理解するチャンスがたくさん持てるようになる。そして、考え方を理解することができる相手が増えれば増えるほど、その場所の居心地がよくなるはずである。

(4)　「話し合い活動」について

居心地のいいクラスにするためには、まずその母体となる班（生徒一人ひとりの居場所となるもの）が必要であると考えた。そのため、話し合うグループ（生活班）を単なるくじで決めるのではなく、学級代表を含める６人の班長で班編成をし、班長を中心に話し合いが持てるようにした。そして、班長が司会・進行を務め、班員からの意見を吸い上げ、発表し合うという

形をとった。

(5)　全体構想図（図１）

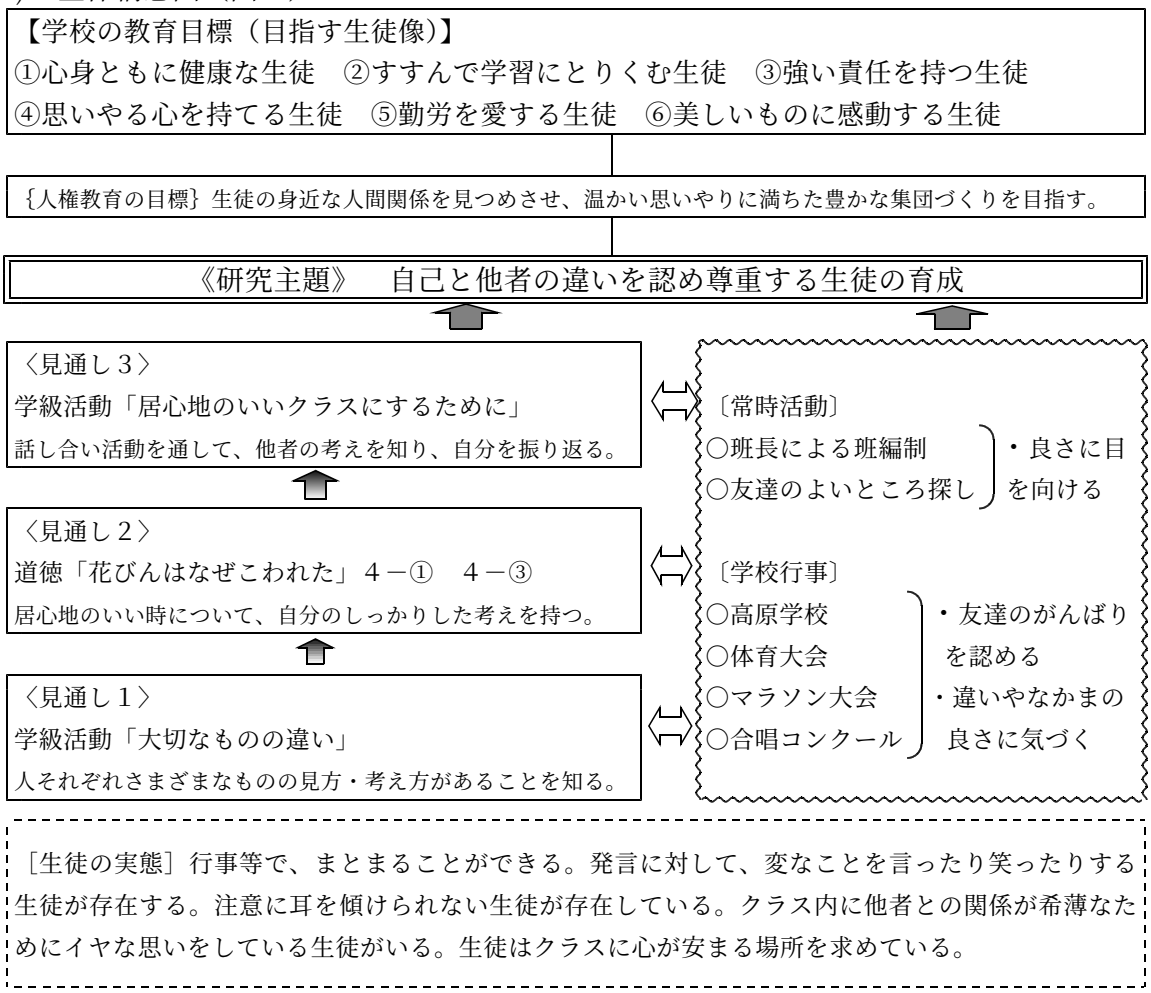


図1　全体構想図

2　実践の概要及び結果と考察

結果の考察にあたっては、学級全体の学習活動の様子および生徒一人ひとりの学習後のワークシートの分析、抽出生徒A子（まじめな生徒だが、友人に流されて心ない言動をしてしまう。授業中の他の生徒の発言に笑ったりしてしまう。）の観察を中心に行う。

(1)　人それぞれさまざまなものの見方・考え方があることに気づくことができたか。

（見通し１）

ア　実践の概要

自分の宝物とその理由について考え、それをグループごとに発表した。その際に、仲間の発表を記入し、最後に感想を書いた。

イ　結果と考察

宝物をいくつか挙げてみると、「小学校の時の修学旅行の写真」や「中学校に入ってからの部活動の道具」・「小学校転校時にもらった千羽鶴」などであった。その理由は修学旅行の写真は「とても楽しかった時のものだし、大切な思い出だから」、中学校に入ってからの部活動の道具は「初めて買ったラケットで、練習や郡大会の思い出がつまっているから」、小学校転校時にもらった千羽鶴は「転校した友達にもらった大切な品だから」とその生徒の考え方や価値観がうかがわれるものばかりである。また、活動を通じての感想は「宝物はそれぞれ違う」

と２５名の生徒が回答しており、「理由もその人なりにあるんだな」と２０名の生徒が回答している。この結果から、人それぞれさまざまなものの見方・考え方があることに気づくことができた。

Ａ子も「みんないろんな宝物を持っていて、それなりの理由があることがわかりました」と回答していることから、人にはそれぞれさまざまなものの見方があることに身をもって感じることができたと言える。

(2)　「居心地のいい時って？」について、自分のしっかりした考えを持つことができたか。

（見通し２）

ア　実践の概要

見通し１では、大切なものについては、さまざまなものの見方・考え方があることに気づくことができた。見通し２ではそれを発展させ、学校生活でもさまざまな考え方があることに気づかせる活動を行った。

まず、道徳の授業で資料「花びんはなぜこわれた」（主人公は花びんがこわれてしまったのを、風のせいだとか暴れていた生徒のせいにしているのだが、実際はクラス内にいた自分にも責任があるのではないかと振り返り、集団の中の一人として集団に対して何ができるかという内容である。）を用いて、〔４－①集団生活の向上、４－③よりよい社会の実現〕を学習した後、自分の居心地のいい時のことを日常生活の中で場面ごとに振り返ることにより、その場面ごとの自分のしっかりした考えを持たせたいと考えた。

本学級でも「居心地のいい時って？」と題して、朝の自習時間、朝の会・帰りの会、授業中、給食中、休み時間、係活動、清掃、給食当番、学校行事の各場面で生徒に「各場面でみんなが居心地よくなるために、あなたがチャレンジしたいことは何でしょう？」を考えた。

イ　結果と考察

資料１は休み時間のチャレンジしたいことについて、生徒の回答をまとめたもの（複数回答可）であるが、いくつかのタイプに分けられる。

まず、「独りでさびしそうにしている人に声をかける」「なるべくいろいろな人と話して、友達の性格などを知りたい」は、なかまを作るために積極的に働きかけようとするタイプである。これは、自分と他者との関係を円滑にしたいという気持ちの表れであると思われる。

続いて、「廊下で座ったり、ドアのところで話すなど迷惑なことはしない」「周りに迷惑をかけない」は、人に迷惑をかけないように

資料1　休み時間のチャレンジしたいこと

○なかまを作るために積極的に働きかけようとする。	・独りでさびしそうにしている人に声をかける。－４ ・なるべくいろいろな人と話して、友達の性格などを知りたい。－１１
○人に迷惑をかけないようにする。	・廊下で座ったり、ドアのところで話すなど迷惑なことはしない。－３ ・周りに迷惑をかけない。－７
○自分で何かをやろうとする。	・おとなしく読書する。－４ ・チャイム着席をする。 ・休み時間と授業の切り替えをしっかりする。－２ ・次の授業の準備をする。－２ ・５分前行動をする。－８ ・教室で走り回っている人などに注意をできるようにしたい。－２ ・いじめや差別はしない。

するタイプだ。これは、今までの自分の行いを反省しているが、これも他者のことを意識しているようである。

そして、「おとなしく読書する」「チャイム着席をする」「休み時間と授業の切り替えをしっかりする」「５分前行動をする」「次の授業の準備をする」「教室で走り回っている人に注意できるようにしたい」「いじめや差別はしない」は、自分で何かをやろうとするタイプである。これは、なかまを作るために働きかけるというわけではないが、集団生活の中で自分で何かをやろうという気持ちが表れている。

Ａ子も、「他人に迷惑をかけないように、廊下などでさわぎすぎない」をチャレンジしたいこととしていて、他者のことを考えているようだ。

特に、違いを感じられ、問題が多いと思われる、休み時間、授業中、清掃・給食当番の時の三つにしぼって自分の考えを書かせた。その際に、チャレンジになっていないものや安易に考えているものには、書き直しをさせたり、深く考えるように指導したりした。以上休み時間のように、授業中や清掃・給食当番についてもしっかりした考えを持つことができた。

(3)　「居心地のいい時って？」について、三つ場面のチャレンジしたいことをグループで話し合う。その際に、自分と他者の考えの違い（自分の意見と同じ点や他者の異なる意見であっても納得してしまう点）に気づき、それを受け入れ、さらにもう一度自分の考えを深めることができたか？（見通し３）

ア　実践の概要

初めに、「居心地がいい時って？」について、休み時間、授業中、清掃・給食当番の本学級の現状を、グループで話し合うことにより振り返った。

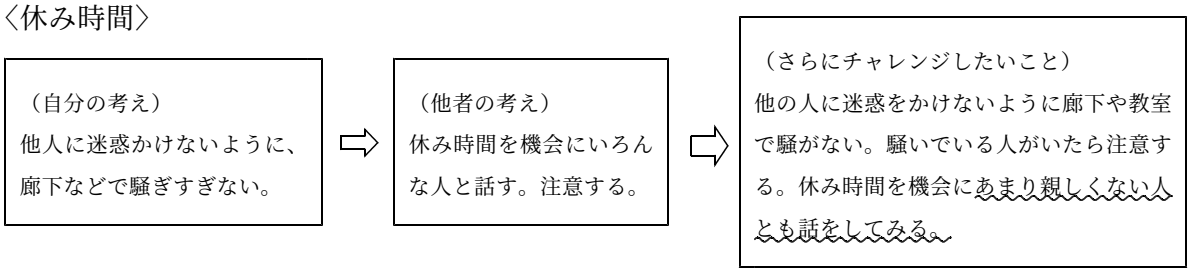
次に、見通し２を受けて三つの場面のチャレンジしたいことをグループで話し合った。その際に、自分の考えと同じ点、異なるけど納得してしまう点をメモするようにした。

そして、自分の考えに他者の異なるけど納得してしまう点を加えて、さらに自分の考えを深めた。

イ　結果と考察

自分の意見をあまり深めていると思えないようなものや今まで自分のできなかったことに終始しているものもあるが、書かれた内容から見て、クラスの81%の生徒が自分の考えに他者の意見を取り入れて、自分の考えを再構築することができた。以下は、自分の考えに他者の考えを加えた、Ａ子のさらにチャレンジしたいことである。

〈休み時間〉

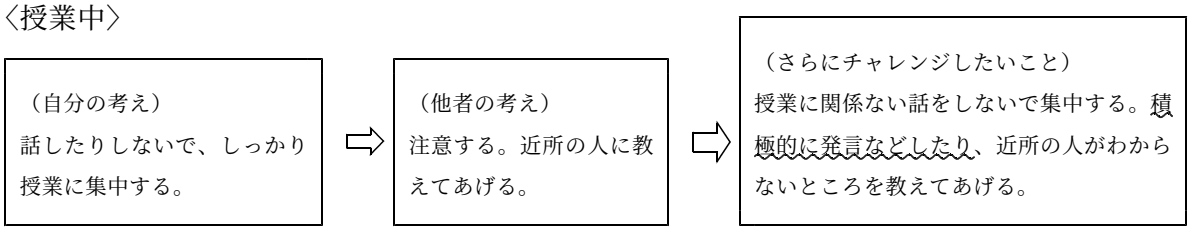


活動的でややもすると騒ぎすぎてしまうＡ子は、〈休み時間〉にチャレンジしたいことを自分の考えとして、「他人に迷惑かけないように、廊下などで騒ぎすぎない」としている。その後の話し合い活動では、同じ班員の意見も注意深く聴き、他者の考えを「休み時間を機会にいろんな人と話す。注意する」とまとめた。それをしっかり取り入れて、「他の人に迷惑かけないように廊下や教室で騒がない。騒いでいる人がいたら注意する。休み時間を機会にあまり親しくない人とも話をする」をさらにチャレンジしたいこととした。友人関係が固定化していて、その関係をなかなか広げようとしないＡ子は、この中で、「あまり親しくない人とも話をしてみる」と自分の殻を破ろうとするような内容を掲げた。これは彼女の大きな変化であり、これ

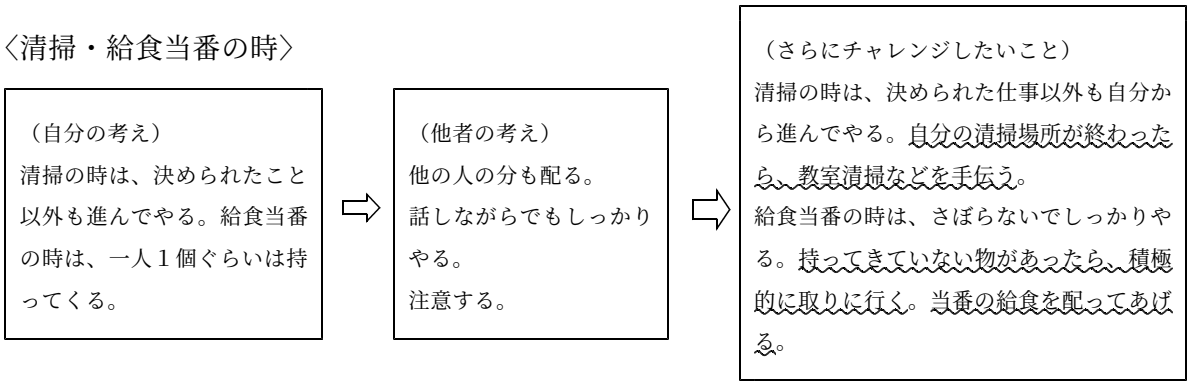
を考えているときのＡ子の表情は真剣そのもので、私も居心地のいいクラスにしたいのだという気持ちがありありと伝わってきた。

〈授業中〉や〈清掃・給食当番の時〉についても〈休み時間〉と同様に考察することができ、Ａ子も他者の考えを取り入れて自分の考えを深めていると言える。

〈授業中〉



〈清掃・給食当番の時〉



Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

自分の大切なものをグループごとに発表し合うことにより、価値観や考え方の違いをつかむことができた。また、居心地がよくなるクラスにするために自分がチャレンジしたいことを考えることにより、各自が日常生活を振り返ることができた。さらに、それを発表し合うことにより、自分との考えの違いを受け入れ、自分の考えを深めることができた。

本研究の後、「チャレンジ週間」と称して、６日間実行する場面を設定してみた。実行後の感想より、Ａ子を含めた６４％の生徒が変わることができたと答えている。

2　今後の課題

本研究は「居心地のいいクラスにしたい」という私の考えから始まったものであるが、その居心地の良さが、生徒の立場での考えた居心地の良さに近くなるようにしたい。そして、居心地のいいクラスにするためには、短い期間では実現不可能であると思われるので、今後もいろいろな活動を通して、実践を継続していきたい。

〈参考文献〉

・土田　暢也　著　　『道徳授業でやさしさづくり』　　東洋館出版社（２００３）
・米村　明彦　編　　『最新教育基本用語』　　小学館（２０００）